



Title	母親の視点から見た子離れの経験：子離れした後、母親であるということはどうに経験され続けているのか
Author(s)	濤岡, 優
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 136, 1-29
Issue Date	2020-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.136.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78793
Type	departmental bulletin paper
File Information	04-1882-1669-136.pdf



母親の視点から見た子離れの経験

— 子離れした後、母親であるということは どのように経験され続けているのか —

濤 岡 優*

【要旨】 本研究では、子どもの自立に伴って経験される子離れに焦点を当て、子離れした後の時期において母親であることがどのように経験されているのかを検討した。そのために、2人の母親にインタビューを行い、その語りを質的に分析した。その結果3つのことが理解された。1つめは、そもそも子離れは子育ての終わりというよりも1つの区切りとして意味づけられており、それゆえに子育ては子離れをした時点で完結するものではなく、子離れをした後の子どもの人生の中で結実し意味をもっていくものとして認識されていること、2つめはそのような子離れに対する認識をもつがゆえに、母親であることは、子離れしたあとにも自らの子育てを振り返るという形で経験され続けていることである。そして、3つめは、その経験され続ける母親であるということは、そのあり方自体に質的な変化が伴っているという意味において、母親になる過程として理解されるということである。以上の結果を踏まえ、本研究は母親であることを、子離れする前の段階だけでなく、子離れの後の時期も含めたより長い時間軸の中で扱っていく必要性、さらに生涯において母親であることが経験され続けていくという前提の中で、親であることの意味や親子という関係性を扱っていく必要性を示唆するものである。

【キーワード】 親子関係、子育て、子離れ、経験、ライフヒストリー

問題と目的

青年期に生じる子どもの自立は、中年期の女性の心理的状态に影響を及ぼすとされ (Harkins, 1978), これまで子育てという文脈を背景に中年期の母親の発達や心理的状态に関する研究がされてきた。しかし、母親が子どもや子どもの発達に与える影響に関する理論や研究は多くあるが、それと比較し、成人期の発達において母親であることの重要性あるいは意義はあまり検討されていない (Belsky, 1981; Guntmann, 1975)。また、自立と関連して青年期及びそれ以降の母親と子どもの関係について、子ども側の視点から検討された知見は多いが (赤木, 2018; 小高・紺田, 2015; 水本, 2018; 水本・山根, 2011), 中年期の母親の心理的状态に与える影響といった母親側の視点から捉えた知見はほとんどないことが指摘されている (北村・無藤, 2001)。このような指摘を踏まえると、母親の視点から子どもが自立する前後の時期について検討していく必要があると考えられる。

そもそも、母親になるということ自体、つまり母親役割の取得はどのように経験されているのだろうか。

* 北海道大学大学院教育学研究院博士後期課程
DOI: 10.14943/b.edu.136.1

子どもが誕生し母親になることの始まりは、「コペルニクスの回転」(鯨岡, 2002)と表現されるような、母親になる過程で最も大きな転換点として理解されている。そしてそうであるがゆえに、この転換点を機に、母親は、どのように自分の行動、思考、感情を変化させ、生まれてきた子どもに自分を適応させていくのか、というように、母親になる過程は子育ての初期の段落を中心に検討されてきた(氏家, 1996)。また松下(2002)は、この母親になることについて、これまで自分自身の主体的な人生の計画や選択が可能であった状態から、「逃れることのできない責任」を付与され、「母親としての自分」と向き合うこと、と説明している。そして、精神的、肉体的、時間的に多くの部分が育児に費やされていく中で、母親としての自分になっていくと述べている。

一方、小野寺(2003)は、母親になった初期の段階に焦点をあて、親になることによる人格の変化を、自己概念の変化という視点から検討した。具体的には、親になることによって、社会に関わる自分、妻としての自分に新しく加わった親としての自分が、それぞれ自分の中でどれくらいの重みをもっているのかとその変化の過程を、親になる前と親になってからの3年間で縦断的に調査した。その結果、母親は子どもが生まれた1年後以降「社会に関わる自分」が顕著に小さくなり、「母親としての自分」が大きくなることが明らかにされた。同じような結果はCowan et al. (1985)でも指摘されており、このことから、女性は母親という新しい役割を得ることによって、少なくとも子どもが生まれて数年の間は、その役割が自分の中で大きな位置を占めるようになること、また親になることは自己概念の変化の経験をともなうことが理解される。

さらに、母親という役割は、母親であることを経験した女性にとって大きな意味をもって語られることも指摘されている。難波(2000)は、女性の生き方が多様化している中で、女性のこれまでの生き方を記述し、将来の女性の生き方、日本の社会のあり方を展望することの意義を説明する。そして、事例研究によって40代から50代までの7名の中年期の女性のライフヒストリーを時代の変化と社会的文脈を踏まえて検討している。その結果、母親たちにとって子育てを終えたことは母親役割という大きな仕事を終えたというある種の解放であったこと、その一方で、親という役割がいかにその女性たちの意識の中心にあるのか、またその母親という仕事がいかに多くの責任と義務を伴うものであったのかが語られた。このように語った母親であることを経験した女性たちの内的発達のプロセスは、大切な人の世話をし、また家庭や職場、地域の中で関係を積極的に創造し親密な人間関係を広げていく中で、自己を確立していくプロセスであると述べられている。このことから、母親であることを経験した女性にとって子育てという営みは、その発達全体の中で大きな位置づけを持ち得るものであると考えられる。

それでは以上のように説明される母親であるということに対して、青年期の子どもの自立はどのような影響や意味をもつのだろうか。

清水(2004)は、人の発達やアイデンティティの形成が生涯続くものであることを前提に、青年期の子どもが母親から巣立つという出来事は、母親が母親役割を抜きにした自らの人生を考えるという心理的变化をもたらし、他の社会的役割を模索するといった自己投入先を転換していくきっかけになると述べる。その上で、母親のアイデンティティ・ステータスと母親役割の受容および子どもへの態度等の関連性を検討している。その結果、子どもの巣立ちに気づいているにも関わらず自分ではなく子どものことばかりを考えるといった態度は、アイデンティティの混乱の要因であることを明らかにした。そして、子どもの巣立ちの時期には、自分自身の人生に目を向けることが、母親のアイデンティティの発達において重要であると指摘する。

また大島（2013）は、子どもの自立を母親としての成長との関連の中で検討している。具体的には、成人期初期の子どもを持つ母親の主観的な子育て体験を通して、中年期の母親の成長がどのように進んでいくのかを明らかにしようとした。その結果、中年期の母親の成長には、母親の子どもへの態度の成長と母親自身の成長があることが示唆されている。そして、母親の子どもへの態度の成長に関しては、これまでは子どもは親が庇護すべき存在であり、同時に子どもに期待もかけてきたが、子どもが親から自立するのに伴い、主体性をもった対等な存在として子どもを認識し、子どもの選択や思いをそのまま受け止めるようになる、という変化があげられている。一方、母親自身の成長に関しては、子どもとの関係が生活の中心であった母親が、家庭の外へと目を向けていく過程として説明されている。つまり、自分の生き方や母親自身の視野が広がっていき、社会とそこで生きる個人としての自分がより意識されることが、母親の内面の成長であるとされている。

しかし一方で、子どもの自立によって母親としての役割の喪失感が生じるという指摘もある。北村・無藤（2003）は中年期女性と娘との関係、そして夫との関係を踏まえて、その関係のあり方と、母親の就業状態とが、母親の自己確立や抑うつ傾向といった母親の適応状態に与える影響、またその関連性を検討している。その結果、母親における今までの子育ての満足感また子育て後の喪失感や娘への過剰依存は、娘の結婚や出産といった生活の状態と関連があることが明らかにされている。特に娘に子どもがいる場合、娘の独立による喪失感や娘への依存の高さが母親の適応状態の悪化に結び付いていることが指摘されている。

また、岡本（2002）も、子どもの自立に伴う母親役割の喪失感によって、台所に立つとめまいや吐き気、頭痛等が生じ、炊事が手につかなくなる「台所症候群」、急速にアルコールへ傾斜が進むアルコール依存症や、不定愁訴が好発しやすくなると指摘している。このように、子どもの自立は、母親が子どものことや子育て以外のことに関心を向けていく契機となり、子どもの自立に並行して、母親自身の個人としての成長過程があること、その一方で、子どもの自立を母親自身がどのように認識するかが、母親のその後の生活における適応状態や精神的状態に大きな影響を与えていることがわかる。

以上の先行研究を踏まえて、母親になること、また母親であることに対して子どもの自立が与える影響は、どのように理解されてきたのかを整理する。まず母親になるということは、子どもの誕生によって自分を中心とする選択や生き方から子どもを中心とする選択や生き方への変化をとまなうものであり、大きな自己概念の変化につながる出来事と理解される（Cowan et al., 1985；鯨岡，2002；松下，2002；小野寺，2003；氏家，1996）。そしてそうであるがゆえに、子育てを経験した女性の自己全体においても大きな意味を持ち得る母親という役割（難波，2000）が、子どもの自立によって変化を求められるとき、母親の個としての成長や発達に再度関心を向けるきっかけになる一方で、役割の喪失感にも繋がる（北村・無藤，2003；岡本，2002）。つまり、これまでの先行研究においては、子どもの自立は、母親としては母親としての生き方から個人、あるいは女性としての生き方への移行を促す出来事とされてきたことがわかる。そして母親役割の喪失（岡本，2002）という言葉が示すように、子どもの自立は母親としての役割の終わりという前提の中で理解されていることが、前述した先行研究から理解される。しかし、子離れをした後も、親子という関係そのものは続いていく。また、小野寺（2003）で説明されるように、子どもが生まれることによって女性が母親になることを、自己概念の比重の変化であるとするならば、子どもが自立した後、比重はそれ以前に比べて低いとしても、

母親であるということ自体は個人の中で存続し続けていると考えられる。さらに、難波（2000）が指摘するように、母親であるということが母親役割を経験した女性の内面的な発達において、大きな位置づけを担い得るものであるならば、それは子どもが自立した後にも何らかの形で個人に影響を与え続けていると考えられる。したがって、子どもの自立期にあたる中年期の女性の発達を検討する上で、子どもの自立後の母親であることを理解することは、重要な視点であると考えられる。しかし、これまでの先行研究では、母親から個人へ移行した後の個人、あるいは女性としての側面に焦点を置いているため（清水，2004；大島，2013），子どもが自立した後に母親であることがどのように個人の中で経験され続けているのかが検討されていない。つまり、子離れした後も親子関係が続くのであれば、母親であるということ、言い換えるならば、母親としての自己はなんらかの形で経験され続け意味を持ち続けていると考えられる。しかし、子育てという役割を終え個人として生き始めた母親というこれまでの理解では、子離れした後も母親であり続けることの意味や母親としての自己のあり方そのものが十分に説明されていない。この子離れや親であり続けることを理解するうえで、それは子どもと母親との関係に限定されるものではなく、子どもと父親との関係の中でも検討されるものだろう。また子離れという現象は、青年期の子どもの立場からは、親からの心理的分離として説明され、先行研究では、母親と父親両方との関係における、親からの心理的分離の過程の検討がされている（池田・大竹・落合，2006；水本，2018）。しかし、父親という役割について、日本の家族では父親の物理的不在・機能的不在、そして伝統的性役割観が顕著であるという指摘がある（柏木，1993）。さらに、子どもが青年期の時期に経験する親子の分離は、幼児期の親子の分離との対比の中で議論されてきた。例えば、幼児期の分離個体化理論（Mahler，1975）を踏まえて提唱された概念としての第二次分離個体化（Blos，1967）や、幼児期の離乳と対比させて説明される青年期の心理的離乳（Hollingworth，1928）があげられる。そして、幼児期の親子の分離は、母親が子を出産するという身体的な分離を起点としてその分離の過程が検討されている（根ヶ山，1995；田島，1995）。このことをふまえると、まず母親との関係に注目することで、この子離れという現象や親であり続けるということの実態をより鮮明に理解することができると考えられる。

よって本研究では、質的な調査にもとづき、子どもが自立した後の母親であることの意味に注目する。そのうえで、自立の視点から子離れを理解し、子離れの後の親子関係において母親であることがどのように経験され、またその経験がどのように変化したのかを検討することを本研究の目的とする。なお、これまでの研究では自立の様々な側面、具体的には心理的、身体的、経済的、行動的などが指摘されてきたが、本研究で扱う青年期の子どもの自立という現象は、そのいずれかの側面に限定したものではなく、それらを包含し全体的に捉えた自立である（久世・久世，1980；平石，2014；西平，1990）。その上で、子離れは、子どもの自立を親の側から捉えた経験として扱う。

方 法

調査協力者

本調査は、母親の視点から子離れの経験を検討するにあたり、以下に説明する2人の母親に調査協力を依頼した。

チェ（当時50代後半）。2人の子ども（30代前半と20代後半）の母親であり、インタビュー当時は長男である息子と同じ職場で働き、比較的生活圏も近くにあった。チェは子育てを期に仕事を辞めたが、長男が小学校に上がった頃に再度働き始め、その後自ら事業も立ち上げるなどして現在も複数の仕事に携わっている。調査者が協力を依頼した経緯については、調査者がチェの経営し管理する職場と繋がったことがきっかけであった。またチェの息子も同じ職場で働いていて、調査者は2人の親子としての関わりを見ることも度々あり、調査への協力の依頼に至った。

トキ（当時50代後半）。2人の子ども（20代後半と中盤）の母親であり、インタビュー当時は体調不良のため、仕事を辞めて実家に戻っていた長女と一緒に暮らしていた。トキは子育てを機に仕事を辞めその後専業主婦として子育てに専念し、また単身赴任をしている夫を支えていた。調査者はもともとトキの家族と繋がりを持っていて、調査依頼の前からトキと直接交流し話す機会もあった。それが今回調査協力の依頼につながった。

選定の理由

2人の母親を協力者として選定した理由は以下の2つである。①子離れする時期の、仕事の有無、②子離れした後も子どもと比較的心理的にも物理的にも近い関係を持っていること、である。①について、先行研究では母親が仕事をしているかどうかの状況が子離れのあり方に大きく影響することが指摘されている（清水，2004）。しかし、本調査では仕事の有無を超えて理解される母親としての経験を検討するために、子離れの時期に仕事をしていた母親と、していなかった母親の両方を調査の対象とした。②については、母親であるということがより意識される機会が多く、子離れした後の母親としての経験がより明確に認識されていると考えたからである。以上を踏まえて、インタビューでは、日常生活で接点を持つ子どもとの関係に焦点をあて、チェの場合は息子（以下、タケとする）、トキの場合は長女である娘（以下、ユキとする）との関係を中心にインタビューを進めた。

面接調査の内容と形式

面接では、協力者の親子関係や子離れの経験に関する内容について聞きたいということを伝えた上でインタビューを実施した。なお、青年期の子どもとの間に生じる子離れが、母親たちの中でそもそもどのようなものとして意味づけられ、子離れの経験が語られるのかについても検討しなかったため、子離れの定義について調査者から提示しなかった。ただし、青年期の子どもと親の親子関係に関する調査であることを調査者に伝えることで、子離れの時期を青年期として設定した。調査では主に、青年期における子離れに関する経験を軸に、①子離れした後の親子関係に対する認識、②子離れした後の母親であることに対する認識について、協力者に分かりやすい言葉に置き換えながら質問し、あとは協力者の語りの流れにまかせてインタビューを進めた。また語られる出来事について調査者が気になったことや疑問に思ったことに

についても質問した。具体的には、インタビューの中で子育てが始まったところのことから現在に至るまでの間で、協力者がどのような子育てをしてきたかが語られたため、その子育てに対する認識等についても詳しく聞いて行った。インタビューの中では、調査者は語られた出来事についてそのきっかけ及び経緯、そのとき抱いた感情や考えを詳しく話してもらえるような問いかけを行った。例えば、「なぜそのように思ったのですか」、「そのような出来事を経験して、・・・に対する見方はどのように変わったのですか」といった質問や、協力者の言葉を言い換えて聞き直し意味を確認するといったような問いかけである。その理由は、協力者によって語られる事実を確認し、その上でその事実に対する協力者の意味づけを理解したいと考えたからである。面接の実施は、2014年の6月と10月にそれぞれ一度行い、その後1回目の内容で不明瞭であった点について詳しく聞く必要があったため、11月と12月に2回目の面接を行った。各面接に要した時間は各1～2時間であった。なお、協力者の背景的な情報を理解するために、今回の目的に即した調査に関する2回のインタビュー以外で得られた語りも参考にしている。

分析手続き

面接内容を分析するにあたり、面接の音声データをもとにトランスクリプトを作成した。また、作成したトランスクリプトを協力者と共有し、訂正、削除、匿名化する箇所を確認して個人が特定されないよう加工し、最終的なトランスクリプトを完成させた。

分析の方法は、ライフヒストリー法を用いた。ライフヒストリー法は、個人の生活構造に焦点をあて（谷，1996）、個人の意味づけを重視しつつ「生活」を対象とする（佐藤，1995）。さらにライフヒストリー法は、語られた内容の大半は、事実であり実際に起きた出来事を示しているという立場をとる。そしてその前提にもとづいて語り手の経験を聞き、経験に対する意味づけの理解を試みる（岸，2018）。この立場は、語りを事実からある程度独立させ、あるいは語りを事実から切り離された単なるストーリーとして扱い、語りそのものの構成やそれが語られる場の相互行為そのもの、つまり語りの構成的側面を重視するライフストーリー法とは異なる立場である。本研究においても、語られた経験を実際に起こった出来事として扱い、事実としての側面により焦点をあてて語り手の人生や経験に対する意味づけの理解を目指しているため、ライフヒストリー法を用いて分析を行った。なお、具体的な分析の手続きは、荘島（2008）を参考に以下の手順で進めた。①面接内容から、親子関係に関する語りを取り出した。②語りを時系列に沿って並べ替え、子離れに関する出来事を中心とした母親としてのライフストーリーとして語り全体を整理した。③整理したライフヒストリーにおいて、特に母親であることに対する意味づけに焦点をあて、1) 子離れをどのようなものとして意味づけているのか、2) その子離れがどのように経験されたのか、3) 子離れを経験した後、母親であるということはどういう意味づけられているのか、をライフヒストリー全体の文脈の中で検討した。また本研究では、2回の面接を実施したが、1回目と2回目で内容が矛盾している点や不一致な点が見られなかったため、1回目と2回目の内容は齟齬のないものとして扱い分析を行ったが、何回目のインタビューで語られたものが語りの分析において重要な場合には、そのことを明記している。なお、面接内容について理解しづらい箇所は、オリジナルの語りの内容を損なわないよう言葉を（ ）等で補った。

倫理的配慮

本調査は、調査者の所属大学の倫理審査委員会による承認を得た上で実施された。具体的には、調査への協力は自由意思に基づくものであり、強制されるものではないこと、調査の協力やその変更・中止によって不利益が生じないこと、個人のプライバシーが配慮されることを、書面及び口頭で説明し、同意書にて調査協力への意思と同意を確認した。

結果・考察

ここでは、まずチェとトキの子離れの経験に関する母親としてのライフヒストリーを、それぞれに整理する。具体的には、親子関係や子育て、そして子離れについて語られた内容をもとに、その経験に関する認識や意味づけ、また母親であるということに対する意味づけを検討する。

チェの母親としてのライフヒストリー

背景

チェは、2人の子どもの母親であり、現在は子育てを終えて、母親の介護をしながら仕事をしている。下の子どもはインタビュー当時、すでに家を出て家庭をもっていたが、息子であるタケとは同じ職場で働いていて、お互いに職場で顔を合わせることもあった。今回のインタビューでは主に今実際に接点を多く持つタケとの関係について聞いている。チェ自身の背景としては、A県の地方で生まれ育ったが、両親の職業上の都合で、高校までの間に何度か家族で地域を移動している。チェは大学を出て就職のためにA県を出た後、数年働いてからA県に戻り、転職を繰り返していた。その後結婚して子どもが生まれ、仕事を辞めているが、数年間の専業主婦の期間を経て、福祉関係のボランティアを始めるようになった。このボランティアをきっかけにチェは様々な関わりをもつようになり、その関わりが今の活動や仕事につながっている。

以上のような背景を踏まえると、チェの子育てには、主婦であった時期と、ボランティアや仕事をしながら子育てをしていた時期があること、そして子どもの自立の時期はチェ自身が働いている中で経験されていたことがわかる。このような背景を踏まえて、実際にその子離れがどのように経験されていたのかを、以下に見ていく。

子離れに関する経験

チェの子離れに関する経験は、チェがこれまでに自分が経験してきた職場での人との関わりと関連づけながら語られた。このことは上述した背景から理解できる。つまり、子育ての時期とチェが社会と関わりボランティアや仕事をしていた時期が、完全にではないながらも重なっていたことが、その所以になっていると考えられる。チェは仕事柄、何らかの障害をもつ人たちと関わることが多く、その職場での関わりが自分の子育てに影響していた、と振り返りながら、その具体的な出来事について語った。チェの職場には、ボランティアとして来ている20代

の男性がいた。その男性は親の家に住みながらバイトとボランティアをしていた。その男性に対して、チェやその職場の人達は家から出て1人暮らしすることを勧めていたが、その男性の親が反対していた。その親子を見ながらチェは子どもと離れることが親にとって必要なことだと考えていた。

C1¹：(その男性の) 親は「うちの子には無理、ちゃんと就職もしてないのに1人暮らしなんかさせられない」みたいな。でも逆じゃんって思って。突き放してあげれば、子どもはしょうがなくて、働くようになるだろうに、何で突き放してあげないんだろうってずーっと思ってる人がいたから。だから子どもはね、やっぱり突き放してあげるのも大事だよなーと思って、すごくそういう外の人を見て自分に振り替えられたっていうか。

このようにチェは、親と子が分離できずにいる親子のあり方を見ることを通して、親が子を「突き放す」ことの必要性を理解したことが以上の語りからわかる。そしてC1の語りを踏まえて「C2:障害持ってる人たちの関わりっていうのはとっても子育てに影響してると思うし、(それが) 無かったら、こんなに手放さなかったかもしれない (中略)、社会に託せなかったかもしれない」と語るように、チェの職場での関わりを背景に、チェにとっての子離れは子どもを手放すこと、社会に託すこととして意味づけられている。

しかし実際のチェ自身の子育てでは、子離れは簡単にできなかったことも語られた。チェが子離れを経験したのは、子どもが大学に通っているときだった。そして、それは子どもが突然大学を中退すると言いだしたことがきっかけだった。

C3：(子どもに大学を) 辞めたいって言われたときすごいショックだったし、何で? と思っ
たし、でもちょうどそういうときっていろんな助けの言葉があって、そんなときはそんな
きで自分の子、もう (大学を辞めるっていう) 結論出してるようになってたから、
ちゃんともっと話聞いてあげれば良かったとか思ったときには、職場にもいっぱいそう
いうボランティアの若い子たち山ほどいて、その子たちのことで必死だったの、あたし。
そしたらね、自分の子全部ほったらかしてね、人の子のことやってたのか、と思って
ちょっと凹んだんだけど、そのとき私よりちょっと上だった人が、「子どもは社会の子
どもだから」って言って、(子どもが) 家にいるときは家でちゃんと面倒見なくちゃい
けないけれども、こうやって人様の子のことを、真剣にその子のことを思っていれば、
自分の子もそこで、自分のような、他人だけどすごく真剣に自分の子のことを考えてい
る大人に世話になっていると信じて、自分の子の代わりにここの子のこと考えるって
言った時に、あ、それその通りと思ったの。(中略) (自分が今の職場のバイトの子のこ
とを本気で考えているように) 自分の子にもこんだけ本気で考えてくれる大人がいてく
れると思うし、それは親がやるよりももっと何倍も効果的なことだと思うから、そう
やって自分で思い込ませてる。

この語りから、子どもが大学を辞めると聞いたときチェは衝撃を受けたと同時に、当時のチェは自分の子どもよりも、職場でボランティアやバイトをしていた他の子どもたちに自分の時間を使っていたと感じ、後悔していたことがわかる。しかし、「子どもは社会の子ども」であっ

て、自分の代わりに他の誰かが面倒を見てくれている、という職場の人からの言葉に励まされて、「自分の子にも（自分のように）こんだけ本気で考えてくれる大人がいてくれる」と思えるようになったことが語りから理解される。そして、それは今の職場での関わりを通しても感じていることがわかる。

またその頃のことを振り返りつつ、チェは子離れすることを以下のように意味づけていた。

C4：（他の人からのアドバイスがなかったら子どもが中退することは）不安だったし、多分自分でなんとかしなきゃって思ったかも。辞めたいって言うてる息子を自分でどうにかしなきゃ、と思ったかもしれない。自分でなんとかしようと思ってるうちは、子離れ出来てないのかもしれないし。外に託せることが子離れっていうのかもしれない。子離れって興味ないとか、離して手放すとかじゃなくて、どっかに託せるとか、その子を信じれるとか、そういうのが子離れなのかもしれないね。

子どもが退学すると言っていた当時に、チェがこの語りのように子離れを理解していたかは分らない。しかし、C4の語りを踏まえると、チェにとって子離れすることは「手放す」ことではなく、社会に「託せる」こと、自分の子どもを「信じる」ことであることであったことがわかる。そして実際に、チェは「自分の子にもこんだけ本気で考えてくれる大人（C3）」がいると信じて、子どもの中退を受け入れ子離れしていったことが推測できる。

このように語られた、“子どもを社会に「託す（C4）」”というチェの表現について、その意味が1回目のインタビューでは明確に語られなかった。したがって、その言葉がチェの中でどのような意味として使われているのか、その意味づけを理解するため、2回目のインタビューは、子どもを手放すこととはどういうことかという質問から始めた。その質問に対して、チェは以下のように説明した。

C5：親ってね、何やってもね、子どものダメなところが自分のせいだと思うの。

I：うんうんうん、なんか前回も言ってましたね。

C6：うん。でそういう面では、ダメなところはいっぱいあるけれども（中略）、その頃（子どもが小さい頃）は100%子どものために全てを使ったっていう自分の中の自信があるから、（子どもを）離せたのかもしれないし…わかんない。（中略）あとは、前に言ったかもしれないけど、ある時点から子育ては社会に任せようと思ったから、これ以上は自分には無理っていうか。

I：無理って思ったんですか？

C7：無理っていうか、自分止まりになると思った。社会に託すと今以上になっていくだろうけれども、自分が（親として）やるってことは、引っ張ってあげるか押してあげるかだけど、そこから先もっと進むには自分の力で行かなくちゃいけないときに、（親が）放してあげないと、紐でつながっているってことでしょ？だから、放してあげないとだめだと思って… 息子に意識を向けないようにした。

チェが息子を手放したのは、安心して手放せるほど子どもが十分に成長していたからではなく、むしろ今でも子どもの姿を見て「ダメなところ（C6）」をチェは感じている。しかし、そ

れでも手放すことはできたのは、「100%子どものために全てを使った（C6）」というチェの中にある子育てに対する自信、そして一方で「自分止まりになると思った（C7）」と語るように、自分自身が子育てを担うことの限界の両方を認識していたからであることが、以上の語りから理解される。特に、チェは子どもが働きたいと言っている職場が、十分な給料を支払うことができないところである状況も理解していることが、インタビューの中では語られていた。それでも「C8：やっぱりそれは子どもを信じれたんだなーと思うけど。辞めても良いけど、辞めたら家出なさいよって。1人暮らししなさいよって。あとはやりたいことのためにバイトしようが何しようが、自分で生活しなさいって言って、出したんだよね。」という語りや、C6の語りからわかるように、お金の収入や職場の不安定さ、また子どもの不十分さを知りながらも、子育てそのものを社会に任せていったことが推測できる。さらにチェは、自分自身のことについても「C9：私が社会に変えてもらった、育ててもらったから、子どもに負けないぐらい私も今も育ってると思うし」と語る。このように、チェは自分自身も社会に育ててもらったという理解をしているからこそ、自分の子どもの子育ても社会に託すというように意味づけられていったことがわかる。

以上のことから、チェにとって子どもを手放す（C7）、社会に託す（C4, 7）、突き放す（C1）といった言葉で表現される子離れは、自然とできたものではなく、意識的にされたものであること、またチェが自分の母親としての限界を認識していたことを踏まえると、ある意味では子の成長のために子を手放さざるを得ないという認識の中で経験されていたことが推測される。

子離れを経験した後における母親であること

以上のような子離れを経験した後の段階において、親子の関係や母親としての自分をチェはどのように認識しているのか。以下では、子離れした後のことを中心にチェの経験や語りを整理していく。まず、大人になったタケと一緒に仕事をする中で、親子関係のあり方について感じている変化について質問したところ、仕事で失敗するタケの姿を見たときにチェが思ったことが語られた。

C10：（タケが仕事に遅刻したという出来事に対して）あのときに自分でも思ったけど、時間を守れないのは親って自分のせいに思うんだなって思ったの。あたしも結構時間ルーズなところがあるから、ちゃんとそれを伝えてなかったのかってふっと思ったりとか。それはまーふとは思ったけど、タケがどう思ってるか分からないけども、もうお互い社会人として、あたしはあまり息子だからっていうふうにはほとんど思わずにいるのと、（中略）ちゃんと社会が育ててくれたっていう安心感がある。（中略）多分あの人もうそういう面では人に恵まれてたから、（社会で）育ててくれてたと思うし、そこはね、なんか感謝できる。

I：じゃあ親として自分と子どもの関係を切り離すっていうのかな。

C11：もう育児は終わったからね。育児終わっちゃったら親子だよ。親子だけど、もうあたしが教育することなんかないし、彼は私を見ていろいろ学んでくれれば良いけれども、私が彼に教えることっていうのは直接教えるわけじゃなくって、社会の1人として自分の親を見ていろいろ学んでくれれば良いと思うし。

仕事に遅刻したタケを見たときに、チェはその責任を親として感じ、自分の子育ての不十分さを感じていた。それでも母親としてではない立場で、その出来事を理解しようとしていることがわかる。そして、「育児は終わった（C11）」と表現されるように、子育てを介した親子の関係に区切りをつけ、子育てを社会に託したという思いがチェの中にあること、また子どもから見た自分の立ち位置においても、自分自身のことを「家庭の中の親」から「社会から見た親」へと変化させて認識していることが、C11の語りから伺える。このようにチェは子どもと同じ職場で働き、そこで働いている子どもの様子が身近に見えるがゆえに、一方では社会人同士として関係を区切りながらも、一方では子どもの働く姿に自分がどのような子育てをしてきたかを見ていること、つまりチェの中で母親としての自分と、同じ職場で働く社会人としての自分が入り混じっていると考えられる。

さらに、これまでに見てきたチェの子育てに関する経験を、チェ自身が今現在どのように理解しているのが以下のように語られた。

C12: (自分のしてきた子育てが) 成功か失敗か分かんないけど。まだ分かんないよね。

I : まだ分かんないんですか？

C13: まだ分かんないでしょ。

I : いつ分かるんですか？

C14: 死んだとき。本人がね。だってさ、人はさずーっと変わるからさ。

I : タケさんが死んだときに自分で分かる。じゃ親は最後まで分かんない。

C15: と思うけどな、あたしは。だってどんなにすっごい幸せでいてもさ、死ぬ時に不幸だったら、あーなんかこんな死に方しちゃったみたいに終わるかもしれないし。

このように、チェは自分の子育てを振り返りながら、その子育てが「成功か失敗か」はまだ分らないと考えていて、さらにC14で子どもが死んだときにわかるもの、言い換えればチェ自身は自分自身の人生の中では分らないままであり続けるもの、として語られている。さらにチェは、以下のように語りを続けた。

C16: 子どもたちには、今分からなくてもいいから、大人になったときに（物事の良い面と悪い面の）両方見れてたりいろんなものが見れる人になって欲しいなと思ってた。

(中略)

C17: (チェが) いなくなったあとに、あ、そう言えばそうやって言ってたなーとかさ、それで良いかなーって、今伝えなくてもさ、後から分かることっていっぱいあるじゃない？ あたしなんか、自分がそうなんだよね。もうあたし馬鹿だからさ、そのときってぜーんぜん分かってなかったんだなーってこといっぱいあるからさ。そのとき分かんなくても後で分かるんだなっていうのも分かるし。

以上の語りから、チェが子どもに何かを教え見せるとき、その時点で子どもが理解することを期待しているのではなく、子どもが大人になっていく過程の中で、その経験が意味を持っていくことを期待していることがわかる。そして、それが子育てであるという意味づけがされて

いる。それは、「そのとき分かんなくても後で分かるんだなっていうのも分かるし (C17)」と語られるように、子育てをしている最中には当たり前で見ていなかったことが、時間を置いた時に振り返って初めて理解できるという認識と類似したものであると推測できる。

この語りから、子育てが「成功か失敗か」はまだ分からないというC12の語りの背景が推測される。つまり、チェの母親としての子どもに対する言葉は、後になって子どもの中で意味をもつものとして理解されている。そしてこのような理解は、もはやチェ自身の子育てという文脈ではなく、子どもの人生という文脈の中で語られていると考えられ、ここにチェの子育てに対する姿勢が読み取れる。このことを踏まえると、自分の子育ては「成功か失敗か」という問いも、チェの子育てという営みの延長にある問いではなく、子どもであるタケ自身の人生に委ねられた問いとして理解することが可能である。そしてそうであるがゆえにチェの子育ての「失敗か成功か」という問い、つまり子どもの人生の中で自分の子育ては、どのような意味を持ってくるのかという問いの答えは、チェ自身は分からないまま終わる可能性があるものとして理解されていると考えられる。

またインタビューの中で子育てとは何か、をチェが自らに問いかけている場面があった。その中で、自分自身の親との関係を思い出し、自分の父親や母親との関係の中で自分がどのように感じているのかを、母親としての自分と子どもとの関係に照らし合わせ、改めて子育てとはチェにとってどのようなものなのかを語っている。

C18: そう言えば子育てっていつ終わるんだろうね。でも、うーん... 子育てって何をもって子育てっていうか分かんないけど、今逆に下の子はママになったから、本人が今子育てしてるから、いろいろ聞いてくるわけだよ、自分のときどうだった？とか、こんなことどうしたら良いと思う？みたいな聞いて、娘だからなおさなんだけど。で、それ(自分の子育て)は良くて失敗しても、成功してるか分かんないけど、お母さんはこうしてたよ、みたいなことを言ったりしてるのも、もしかしたら子育てなのかも。

I : あー母として育てるみたいな。

C19: うん、かもしれないしね。それだったら、息子も今こうやって一緒に仕事をしてることも子育てかもしれないし。

I : じゃ、(子育ての) 区切りで終わったみたいな感覚はない？

C20: うん、だって子育てって何かってあんまり意識してないから... それが分かればそれで終わったとかなるかもしれないけど。一緒にいる時間は減ったって思う。けど(子どもと) 話さなくても何しても、多分それは老いていくことも子育て。あーそうだ、それは。あたしは親に自分の親に、今年のX月に父が亡くなったけれども、どうやって老いていくとか、年を取って死を迎えてくとか、すごい教えてもらったし。それは今もまだ母はいるけど、母にも今まだ教わってるし。

I : 何を教わってるんですか？

C21: どういう年の取り方をしてるかとか、年を取ったらどうなっていくかとか、どういうふうに感じるんだとか。それを見て自分も(年をとっていくことを) 受け入れてくのかかもしれないし。

(中略)

C22: (自分は親に) 子育てされてると思ってた、そう言えば。だからきっと終わらないんじゃ

ないかな、自分の子たちに対しても。良くても悪くてもね、こんなふうな生き方したらこんななんっちゃうよ、みたいなのも含めて子育てなんじゃないかな。

以上のように、チェはインタビューの中で繰り返し語られてきた子育ての意味を、自分の親との関係に重ねながら理解し直していることが、この語りから分かる。C11では子育ては終わったと語る一方で、C18のように子育てをする娘に自分が子育てをどのようにしてきたかを伝えること、また息子と一緒に働くことも子育てなのかもしれないとも理解していることがわかる。そして、このように子育てについて改めて捉え直していく中で、チェは自分の親が年をとり死を迎えていく姿を通して、自分も教えられていると語った。そして「老いていくことも子育て(C20)」という表現からわかるように、チェは年を重ねていく親の姿を自分が身近で見ていることを、「子育てされてる(C22)」と理解していることがわかる。このように、親から今も学んでいる自分を認識することで改めてチェは、自分も自分の生き方を見せていくことが子育てになるというように、子育てを意味づけていることが伺える。

以上の語りのように、チェのインタビューでは、子離れをどのように経験してきたかが語られると同時に、それを自分の親との関係に重ね自分が親に今も子育てされていることを語りながら、自分と子どもの関係における子離れした後の親子関係が語られた。

以上に整理してきたチェの子離れの経験から、本研究の分析の観点として設定した3つの問いをもとに、母親であることに対する意味づけを以下に検討していく。

1) 子離れをどのようなものとして意味づけているのか

まず、チェにとっての子離れは、C2, 4, 6の語りで繰り返し語られるように、子どもを「社会に託す」ことであることがわかった。つまり、子離れすることによって、子育てという営み自体も終わるのではなく、自分が手放した後も子育て自体は続いていくものであり、その担い手が自分から社会へと変化した、という認識をもっていることがわかる。そして、子どもを社会に託すという子離れの認識のもと、具体的に家から子どもを出し物理的にも距離を作ることと決断したことがわかった。さらに家から出すということも、C3やC8の語りにあるように、子どもが大学を中退するという出来事が生じ、かつこれからその子どもが就職しようとしている職場の収入が不安定で十分なものではないことを知っている状況であったが、それでも子どもを家から出し一人で生活させることが、チェにとっての子離れであったことが理解された。

2) 子離れがどのように経験されたのか

子どもを社会に託すという形での子離れの経験で、チェは葛藤や不安を感じていたことがわかった。そしてその葛藤や不安の要因は、子どもが物理的に家からいなくなるという寂しさよりも、子どもの不十分さや親としての不十分さであることがわかった。具体的には、「子どものダメなところが自分のせいだと思う(C5)」や、「自分の子全部ね、ほったらかしてね、人の子のことやってたのか(C3)」と語られるように、子育てに対する不十分さや自分の子どもに十分な時間をかけることができなかったという後悔といった、子離れを躊躇うような思いがあったこと、それゆえに十分に条件が整った状態での子離れではなかったことがわかる。それでもチェは、子育てをする親としての限界を認識しつつ、一方では親としてやれることはやっ

たという自信（C6）を持ちながら、子どもの大学中退を受け止め、その後の生活の先行きが困難になることを分かりつつ子どもに一人暮らしをさせていった。以上のチェの子離れの経験に関する語りを踏まえると、チェは当時の子どもの状態を、家を離れ社会で生きていくには不十分であると認識していたからこそ、子離れに不安や心配を感じていたことが推測される。同時に、「自分止まりになると思った（C7）」とあるように、母親としての不十分さを感じていたからこそ子離れすることができたことが推測された。つまり子離れの必要性に対する認識は、子育てそのものに対する不十分さと限界を認識する中で生じたことがわかる。加えて、チェの場合、子離れすることは自分から子どもを手放すということだけでなく「社会に託す」という意味づけがされていた（C4）。つまり、子離れによって子育てという営みが終わるわけではなく、自分が子どもを手放すことで、社会が代わりに子育てを担ってくれるという子離れに対する意味づけがされたことによって、子離れできたことがわかる。また、自分が他の子どもと真剣に関わることによって、自分の子どもにも誰かが真剣に関わってくれていると、今も思い込ませているという語り（C3）や、仕事で失敗する子どもを見て親としての自分の不十分さを感じながらも、社会に子育てを託し続けていこうとする語り（C10）から、チェの子離れに対する意味づけは過去のものではなく、今現在も意味づけられ続けているものであることが推測される。このことから、子離れに対する意味づけが変わることによって子離れすることができたと同時に、社会に子育てを託し続けることによって、子離れに対する意味づけ自体も終わることなく、経験され続けていると考えられる。そしてそれは、C9の語りにもあるように、チェ自身が社会に育てられたという、自らの経験を背景にもった意味付けのされ方であることが推測される。

3）子離れを経験した後、母親であるということはどうのように意味づけられているのか

子離れした後の親子関係で、チェは母親としての自分や親子としての自分をどのように認識していたかについて、以下の3つのことが推測された。

まず1つめは、チェは子離れした後にも、職場での「お互い社会人（C10）」の関係も持っているため、今の親子関係を社会人同士の関係として割り切って理解していることが分かる。しかし一方で、職場で失敗をする姿を、自分が育てた息子として見ていることもC10の語りから伺える。つまり、チェは母親という立場からも子どもを見ているということである。このように、子離れした後に親子という関係以外の関係をチェは子どもと共有していたとしても、子どもの姿を見る中で母親としての自分が意識される瞬間や出来事があるとわかる。

2つめは、チェにとって母親として取り組んできた子育ては「成功か失敗か分かんない（C12）」ものとして意味づけされていることがわかった。その意味づけの背後には、C16・17の語りからわかるように、チェは子どもに何かを教え、あるいは何かを見せるという子育てが今という時点で生じていることだとしても、それを子どもが理解し意味を持ってくるのは、現在ではなく、未来になったときであるという理解があると考えられた。つまり、子育てが「失敗か成功か」という問いは、チェの子育てが終わることによって明らかになるのではなく、子どもの人生の中で結実し意味をもち得るものとして意味づけられ、語られていることが推測される。

3つめは、チェは子どもに対する子育ては今も続いていると認識しているということである。子育てについて、1回目のインタビューの語りであるC11では、子育てはもうすでに終わった

ものとしてチェは語っている。しかし、2回のインタビューでは、自分の子育てや親子関係について振り返る中で、今も子育てをしていると語った。その語りの背景には、自分の親が年をとり、また死んでいく姿を見ることを通してチェ自身が教えられ、自分も子育てされている、という認識があった。このように、チェと子どもの親子関係（第2世代と第3世代の親子関係）の中で子育てを理解したとき、子育ては終わったものとされるが、チェの親とチェの関係（第1世代と第2世代の親子関係）の中での子どもとしての経験が、親としての経験と重なったときに、自分が年をとっていく姿もまた子育てであるというように、子育てに対する意味づけ、そしてそれに伴って母親であるということに対する意味づけが拡張されていると推測される。

以上のように、チェの母親としてのライフヒストリーを整理し、さらにその語られる経験から、子離れがどのように経験され、またその子離れの経験の後には、母親であるということがどのように語られているのか、に注目しながら整理してきた。ここからは、もう1人の協力者であるトキのライフヒストリーを検討する。

トキの母親としてのライフヒストリー

背 景

トキは2人の子どもの母親であり、子どもが生まれてからインタビュー当時まで、専業主婦として家事や育児に取り組んできた。トキは、大学を卒業してから子どもが生まれる前までは仕事をしていたが、子どもが大きくなってから再度働くことはしなかった。またトキの夫は同じ県ではありながらも離れた地域で単身赴任をしているため、ユキが大学の頃には基本的に夫と離れた生活だった。トキ自身の背景としては、大学への進学も職場もA県内で、結婚するまでは実家から大学や職場に通っていた。トキの親子関係に関する語りでは、第一子であるユキとの関わりに焦点を当てて聞いている。ユキも大学は自宅から通っていたため、就職するまでトキと同じ家で生活していた。さらにユキは一度就職し実家を離れたが、しばらくして体調不良になり実家に戻ってきた。そのため、実際に離れて生活していた期間は数ヶ月ほどだった。

子離れに関する経験

トキの子離れにおいては、子どもが海外に留学したことが中心的な出来事であった。そして、以下の内容では、1年間離れて子どもと生活することを経験したときに、トキがどのようにそのことを受け止め、どのようなことを感じていたのかが語られている。

T1：（ユキが留学していた間家に）いなかったでしょ、毎日顔を合わせるのが当たり前だったのに、9ヶ月間会わないとちょっとやっぱり距離が出来るのよ。べったりな親子関係じゃなくて、その9ヶ月間（ユキは）毎日いろんな経験を積んでるであろうけれども、（中略）そういった親と話さなかった分も積み上げて彼女という人間が9ヶ月分出来るわけだから、それは私の知らない彼女であって、そうやって出来た彼女はもう私の庇護のもとに置いてる雛鳥ではなくなってるから、（子離れしたのは）そのあたりからかな。もちろん、経済的にはまだ親の脛を齧ってるので、そういうところでは「まだまだあんたは子どもだね」みたいなことは言ってしまうけれど、（中略）もうある程度一人前の人間だなって思えて。留学は大きかった。

ユキが留学するまでトキはユキと長期間離れて暮らすことを経験したことがなかった。それゆえに、ユキが留学している間、これまでのように同じ生活圏で暮らし交わしていた会話ができない状況は、トキにとって子どもとの距離を感じさせるものであったことがわかる。そして海外というトキにとっては未知な環境で、子どもが人と関わり生活していることを想像しながら、子どもが「一人前の人間」であるという認識を持ち始めていったことが理解された。特に以下の語りでは、留学中にユキがいないという現実がどのようなものとして感じられていたのかが語られている。

T2：ちょうど、夜寝るときは（家の）ドアが全部閉まってしまうわけだから、（普段であれば）朝起きたらみんなの部屋のドアが閉まっていて、そこをあたしが朝一番に起きれば、その部屋の前を通って下に降りていくのに、（留学に行ってから）朝目が覚めて自分の部屋のドアを開けたら、目に飛び込んでくるのは（娘の）ガランとした部屋だから。いわゆるこれが空の巣症候群なんだな、まさに空っぽの巣を見るような感じで、いないんだなっていう現実を毎朝毎朝突きつけられるのは、すごく辛かったけれど。（中略）葛藤しながらも、私もちょっとずつ子離れの時期を作れたんだなと思う。（中略）ゆくゆくはこの家を出てく存在だっていうのは常に頭にはあるのね？でも思い描いていた形は、大学を卒業してからだ、と思っていたから、留学っていうのはやっぱり突然降ってきた話だったので、もうこんなに早く巣立っちゃうの？っていう気持ちはあったけれど、でもほら、留学は留学であり、やがては必ず帰ってくるから、お試し期間かなってお互いにとって。子離れ、親離れの良い期間なのかしらとは思った。

トキは子どもがいない物理的な空間の中で、具体的に起こった日常の変化を目の当たりしていた。そしてこの状況と向き合った自分をトキは自ら「空の巣症候群」と表現するように、文字通り空になった部屋を見ながら過ごす中で空虚感を感じていたことが伺える。一方でユキが大学生になったときのことについて、「T3：（大学に入ってから）4年後にこの家を出るんだということは、私自身も多少は心の準備をしないと。え、ずっと家にいてくれるんじゃないの？って言って、あたしが悲しい、傷ついちゃったらあたしも辛いから、いずれ巣立っていく人間だから、出来るだけまともな大人にして送り出そうと、4年の間に。そういうふうにするのよね、大学生になったときは。」と語られるように、ユキが大学に入った時点で、子どもが大学を終了したときには大人として家から出ていくことを先に見据えていて、そのときに備えて自分も気持ちの準備を始めていったことがわかる。しかし、大学を卒業する前の留学はトキにとって突然の「巣立ち」として意味づけられ、思いがけない「子離れ、親離れ」の期間であったため、そのことを受け止めるのが容易ではなかったことが推測される。それでも留学が終わったら子どもが「必ず帰ってくる」という認識の下で、いつか訪れる完全な「巣立ち」の日に備えて、その期間を過ごしていたことが伺える。

この子どもと離れるということがトキにとって具体的にどのような意味をもっているのかを理解するため、その意味について調査者が質問したとき、トキは以下のように語った。

I：留学していた期間にユキと離れるということはどういう意味で離れるんですか？

T4：仕方がないことだって受け入れることが出来たんだろうね、あの日々があったから。

きっと2・3週間とか1ヶ月で戻って来られたら、まだ（子どもの巣立ちを受け入れる）あの気持ちは、そこまでは固まらなかったんだろうけど、9ヶ月はやっぱり長かったから、今日もない、明日もない、来週もない、来月もない、こうやって日々、ずっと続いているって、子どもは巣立っていくんだっていう現実を受け入れるための日々だったんだと思う。（中略）でもあれは初めて離れた期間だったから、寂しい気持ちもやっぱり、特別な寂しいだったのね。でそれを経たことで、あーこうやって子どもが巣立つのを受け入れる親の心構えっていうのが出来るんだなって思った。

I：仕方のないことだっていうふうに考えないとなかなかそれを受け止められない

T5：そうね、そうね、頭の隅で子どもは巣立つものと理解はしていても、生まれてからずっと一緒だったんだから、本当にいなくなっちゃうってこうなんだっていうのが、なかなかね、身を持って感じるのはそういうことでもないと分からないでしょ。

以上の語りから、子どもが巣立っていくこと、つまり家から出ていくことは、トキにとって頭で分かっていたことであったが、子どもが「生まれてからずっと一緒（T5）」であることがトキにとっての今までの現実であったことが分かる。そして、そうであるがゆえに子どもの留学によって子どもの巣立ちを「身を持って感じる（T5）」ことで、初めて「子どもは巣立っていくんだっていう現実を受け入れる（T4）」ことが始まったことがわかる。つまり、留学によって、子離れについて認識していたことと実際の経験が重なり始めていったと理解される。そして、留学の間子どもと離れることは、トキにとってこの物理的に離れる状態がこれからずっと続いていくという子どもの巣立ちを予期させ、同時にその現実を「親の心構え（T4）」として受け止める契機になったことがわかる。それは、子離れすることが「T6：私も親の立場を少しずつ引いてかないと、そこで（子どもに）干渉しちゃうとね、なかなか一人立ち出来ないから」と語られるように、トキは親の立場を意図的に引いていったことが理解される。このように、子どもが家を出ていくという現実を受け止めることは、親の役割としてトキの中に意味づけられていたことが推測される。では、子離れがなぜそれほど覚悟を必要とするものなのだろうか。その親としての役割として語られる子離れの語りの背景は、トキが母親として子どもとの関係をどのように始めたのか、そのことに関する語りから理解された。以下の語りでは、トキが第一子として産まれたユキのことをどのような存在として捉え、またトキ自身が母親としての自分をどのように認識していったのかが語られている。

T7：ユキが我が家にやってきたっていうところで、大変な事態なのよ。そもそも私子どもと付き合うのが、どうやって付き合ったら良いか分からなかったのに、今腕の中にベビーがいるわけじゃない？で全てにおいて第一子だから何をするのも初めての経験でしょ？もう自分がパニック（笑）。（中略）でも私も親になれたんだなっていうのはあったかもね。

この語りから、トキにとって子どもとの関わり1つ1つが初めての経験であったこと、そしてそうであるがゆえに「パニック」と表現されるような混乱の状態にあったことがわかる。また以下では、生まれたばかりの子どもとどのように関わっていったのかがさらに詳細に語られている。

I：子育ての中で母親の自分を意識する瞬間とあってありました？

T8：おっぱいあげてるとき。幸いなことに、粉ミルクじゃなくて母乳で育てることが出来たので、粉ミルクだと周りの人にもお願いも出来て楽ではあるけれども、母乳は他に誰も変えることが出来ない私だけの仕事だから、私だけしか出来ないんだっていうのは、私だけが出来るとも言えるわけで、そのときは私はお母さんなんだなって思った。

I：私だけが出来ることっていうふうなのってこうやっぱ自分を母親にする上で大きい。

T9：大きかったね。ともすれば、お母さんはやっぱり3時間置きに、昼も夜もおっぱいを与え続けなきゃいけないから（中略）私がやらなければ、この子飢え死にしちゃうわけよねって思うから頑張れちゃう。そういうときは、こんな私でもお母さんなんだなって思えるのよ。（中略）「お母さんちゃんとやってるじゃない、あたしだって」って思う瞬間が積み重なると、誰でも母親になるんだらうなって、妙に納得するときでもあるのね、おっぱいあげたりそういう世話をしているときは。

この語りからトキは子どもが大きくなるにつれて、自分は母親として対応していけるのか、という不安や心配を感じながらも、子どもにおっぱいをあげるという子どもとの関わりは、「自分だけができること」としてトキの中で意味づけられていったことがわかる。そして自分が母親であることを感じる瞬間の重なりによって、誰もが母親になっていくという考えをトキが持つようになっていったことがわかる。このように、おっぱいをあげるといった子どもの世話をすることによって、自分だけではなく「誰でも母親になるんだらうな（T9）」という理解に至るほど、子育ての営み1つ1つがトキの母親としての認識を形成する上で大きな意味をもっていたことが推測される。

このようなトキの子育ての始まり、つまり子どもと関わり自分にしかできないことの積み重ねの中で自分が母親になれていることを認識していった、そのトキの母親になる背景をみることで、トキにとって子どもが家から出ていくという子離れは、自分を母親にしてきた子育ての終わりであり、それが寂しさを伴う覚悟を要するほどに大きな出来事であったことが理解される。

このような母親になる過程をもつトキは、子離れを覚悟した留学の出来事をふまえながら、子どもが就職し家を出て行ったときのことを以下のように語った。

I：（ユキが）大学が終わって社会に送り出したときに、子育てが終わるって考えるって言ってたじゃないですか。だからユキが働き始めて家を出るっていうときやっぱすごい覚悟したんですか？

T10：うんした。したけどやっぱり留学の経験があったから（中略）。だから就職して家を出たときはもう悲壮な気持ちは全然なかったの。もう来るべきものが来たぐらいの気持ちかな。

トキの子どもの「巣立ち（T3）」という表現には、子どもが大学を卒業し家を出ていくことが想定され、それがトキにとっての子離れとしての具体的な出来事であったことが以上の語りからわかる。そしてその子離れは、トキの中では「来るべきもの（T10）」と表現されていることから、トキにとっての子育ては子離れも含めた営みであり、また子離れは子育ての終わり

の地点として位置付けられていることが推測される。

子離れを経験した後における母親であること

以上のように語られる子離れの経験を経た後の親子の関係や母親としての自分を、トキはどのように認識しているのか。以下の内容では、子どもが仕事を辞めて家に戻ってきたインタビュー当時の状況について語られている。

T11: (ユキが家を出て) そっから先はもう本当にあたしの親としての仕事は一区切りだから、育て上げた一人の人間を社会に出した時点で、私の親の仕事はほとんど終わりだと思っているので、そっから先はもう人間対人間の付き合いじゃないかなって思って。

I : 今はそういう感じで関わってるんですか？

T12: 脛は齧られてるけれどね (笑)。だってまさか戻ってくると思わなかったもの。(中略) でも家に戻って来ても、やっぱり一応独立した社会人になったわけだから、数ヶ月間でもね。だから、親子と言うよりはもう今は同士かな。悪いことしたり楽しいことしたり、いろいろ全部同士ですね、仲間意識かな。家族の話をするときは親子であり、今日の料理は何にしようとかか言う時は、食べさせてやってるとかそういう立場じゃなく、2人で一緒にキッチンに立つんだから、これはもう同僚でしょう？多分ね。(中略) 親子なんだけど、同僚みたいな感じがしらね。

仕事を辞めて実家に戻ってきた子どもと自分の関係をトキは「人間対人間の付き合い (T11)」と表現した。その付き合いは、一緒に何かを楽しむときは「同士」「仲間意識」となり、家族の話をするときは「親子」となり、一緒にキッチンに立つときは「同僚」となる (T12)。そしてトキは、子どもが同じ家で生活をしている当時の関係においても、親子の関係でありつつも、子どものことを「独立した社会人 (T12)」として認識していたことがわかる。このことから、今の親子の状態が子どもが就職し、家を出て行く前、つまり子離れする前と同じ状況であったとしても、トキの中では、子どもに対する認識が変化していて、そうであるがゆえに母親としての自分に対する認識や関係の捉え方も、子離れする前とは異なっていることが伺える。

また、今子どもと一緒に生活している中でトキがどのように感じているのかについて質問をしたとき、トキは以下のように語った。

T13: 大人になったユキと話しているのは楽しいな。今、子どもの時代を振り返って、あのときそういうふう感じていたんだっていう発見が結構あって、話していて楽しいんだと思う。共通の思い出はたくさんあるんだけど、そのときどういうふうに思っていたか、(中略) 大人になった彼女の口から聞くっていうのはすごく面白い。(中略) そのときは多分、保護者として (子どもを) 守るべき相手としての対象で見てるから、(自分が) 感じることも、大げがじゃなくて良かったとかそういう感じでしかないけれども、10年15年経って今その話をするときには、ドキドキだったとか怖かったけど楽しかったとか、そういった話を大人になった彼女の口から聞くのは面白い。

I : なんか、こう守る対象として小さい時は (子どもに) 関わっていた？

T14: そう、活発だからいつ怪我をされるか分からないので、目を光らせて、常にそういう危

険な方に行かないようにとか、伸び伸びは育てたいけれども事故には合わないで欲しいという気持ちがあるから、そういう意味で目を配らなくちゃいけないという、いっぱいいっぱいの気持ちで。自分自身もつまり余裕がなかったんでしょうね。

以上の語りから、子どもが仕事を辞めて戻ってきたことで、一緒に過ごす時間が多くなったこともあり、トキは子どもと一緒に昔のことを振り返り、その中で大人になった子どもから小さい頃のことを振り返って聞くのが面白いと感じていることが伺える。そして、そのように振り返ることができるのは、子育てしていた当時、トキは「いっぱいいっぱいの気持ち (T14)」で「余裕がなかった (T14)」が、今その子育て最中の頃から時間的な距離ができたからであると推測される。

では、今の母親としての自分自身をトキはどのように認識しているのだろうか。トキが小さい頃と今という時点において、子どもの変わらないところについて話したときに、その内容を受けて、調査者が自分がしてきた子育てや母親としての自分を振り返って思うことについて尋ね、トキは以下のように語った。

T15: まだ成果は出てない。これからユキ自身が母親になったときに、その成果が分かるのになっていう気がする。とりあえず、社会人として世間様に出せる一人前に育てたというところで区切りはついたけど、母子の関係が終わったわけではないし、彼女が母になったときに、さらにまた関係が変わってくるのかなって、彼女が母としてどう動くのかを。それは、私の影響も出てくるんじゃないかなっていうのを、面白半分怖いの半分で。だから、総括するにはまだ早いと思う。

I : 自分の母としての？

T16: うんうん。彼女が母親として子どもを育てているときに「え、そんなことするの？」とか「だってかーちゃんあたしをそうやって育てたじゃない？」とか。「そう思っていたのか、私はそんなつもりじゃなかったのに」とか発見があるかもしれないじゃない？だからまだあたしは総括出来ないな、とは思う。区切りはついたけど、振り返るにはちょっと早い。

母親としての自分についてトキは「総括するにはまだ早いと思う (T15)」と答え、ユキが母親になったときに「母としてどう動くのか (T15)」を通して、トキが母親として取り組んできたことの「成果が分かる (T15)」と語った。つまり、自分の子が次の世代の子どもを育てる姿から、母親としての自分のこれまでの子育てがどのようなものだったのかを「発見 (T16)」出来るとトキは理解していた。さらに親子の関係についてトキは、子育ての「区切りはついたけど、母子の関係が終わったわけではない (T15)」と語った。そしてそうであるがゆえに、母親としての自分についてトキは「振り返るにはちょっと早い (T16)」と認識していることが推測される。以上のように、母親としての子育ては終わったが、だからといって自分のこれまでの子育てを今の自分や親子関係から切り離せるわけではなく、これからその成果が見えるとトキは理解していて、その視点から今の親子関係や母親としての自分を認識していることがわかる。

以上に整理してきたチェの子離れの経験から、本研究の分析の観点として設定した3つの問いをもとに、母親であることに対する意味づけを以下に検討していく。

1) 子離れをどのようなものとして意味づけているのか

まず、トキにとっての子離れは、子どもが大学を卒業して家を出ることとして認識されていることがわかった。その前提の中で、トキは子どもの留学や離れて生活した期間を「子どもは巣立っていくんだってという現実を受け入れるための日々 (T4)」として意味づけ、やがてくる子離れに備えていたことが理解された。また、そのように認識される子離れは、T11で「育て上げた一人の人間を社会に出した時点で、私の親の仕事はほとんど終わり」と語られるように、子育ての区切りであり、同時にT7-9で語られたような、トキ自身を親にしてきたプロセスの区切りであったことがわかる。さらに、そのような区切りとして子離れを位置付けていたからこそ、トキは留学中子どもが家にいない空間に、空虚感や寂しさを感じながらも、子離れを子育ての営みの中に位置付け、母親の役割として引き受けていったこと、そして子どもの巣立ちを「来るべきもの」として経験していったことがわかる。

2) 子離れはどのように経験されたのか

子離れの経験については、トキの子育てが実際に始まったときの語りを通して、子どもそのものの存在やその具体的な関わりの中で、トキが母親になっていったその経験が理解された。そして、「こんな私でもお母さんなんだなって、思えるのよ (T8)」と語られるように、トキの中では母親になっていく自分が意識的に経験されていたこと、そして「育て上げた1人の人間を社会に出した時点で、私の親の仕事はほとんど終わり (T11)」と語られるように、その母親になっていく過程でもあった子育ての最後の段階として、子離れという出来事が位置付けられていると理解された。このことから、トキにとって親子関係は自分を母親にしてきた関係であり、その関係の中で子離れすることを母親の役割として捉えていたこと、また「来るべきものが来た (T10)」と語るように、母親としての覚悟をもって子どもを手放し、子育てそのものを終えたということが推測された。そしてそうであるがゆえに、子どもの留学によって子離れすることが現実のものとして経験されたとき、それは子どもがいないことに対する寂しさという葛藤に繋がっていったことがわかった。つまり、子どもとの距離が生じる出来事によって、子離れについてすでにもっていた認識と実際の経験が時間的空間の中で重なり、子離れが寂しさを伴ったものであることを理解していったことがわかる。このことから、トキの中でいつかは来るべきものとして想定されていた子離れが、現実的なものとして形になっていったときに、子離れは覚悟が必要なものへと変化していったことが推測された。

3) 子離れを経験した後、母親であるということはどのように意味づけられているのか

最後に、子離れした後の母親としての自分や親子関係に対する認識について、以下の3つのことが推測された。

まず1つめとして、トキは子離れした時点で、親としての仕事はほとんど終えたと認識し、今の子どもとの関係を「人間対人間の付き合い (T11)」として理解していることがわかった。つまり、トキにとっては、子どもを社会に出した時点で、子どもとの関係は親子というよりも「同士」や「仲間」といった言葉 (T12) で表現されるような、対等さを持った関係へと変化

したことが推測できる。また、「家に戻って来ても、やっぱり一応独立した社会人になったわけだから (T12)」と語られるように、たとえトキが今子どもと一緒に住んでいる状況は、子離れする前の状況と同じであっても、子どもを社会に出すという区切りが経験されたことによって、その前後でのトキの子どもに対する見方や関わり方は質の異なったものであることが推測された。

2つめは、トキにとって母親としての自分は今の時点では総括できないものと意味づけられていること、そしてユキが子育てをしている姿を見的过程中で自分の子育ての成果が見え、母親としてやってきたことの新しい発見があると認識していることがわかった。またT13の語りから、子育てしてきたころの出来事を子どもと共有する中で、改めて親子としての経験を意味づけ直す過程を、今トキが経験していることがわかった。つまり子育てを振り返ることを通して、母親であることの意味の再構成がもうすでに始まっていると推測される。

3つめは、2つめで指摘したような子育てをしていた頃の振り返りが可能になったのは、子どもを守る役割を担った親から、子どもが巣立ったことによって子どもと対等な立場をもった親へとトキの立ち位置が変化したことによることがわかった。そして子どもを守る存在としての親 (T14) という立場から距離ができたときに、初めて今まで自分がどのような子育てをしてきたのかを見ることが可能になったと推測された。このことから、1つめに指摘したように、トキの中での親子の関係は子離れの前後で質の異なったものとして認識されているが、その関係の変化によって、トキの子育てとの距離、さらには母親としての自分との距離も変化し、振り返るという視点をもつことができるようになったといえる。しかし、その振り返りは、もうすでに上述した2つのことを踏まえると、子離れする前と後とで、親子関係や母親としての自分がそれぞれ切り離されて認識されているのではなく、1つの繋がり、流れの中で生じているという前提で理解する必要があるだろう。

総合考察

以上に結果として示してきた2人の母親の語りを照らし合わせながら、母親の視点から捉えた子離れの経験、またそれを経た後の今の親子関係や母親であるということの意味づけがどのようにされているのかを、2人の語りに見られた共通点にもとづいて考察する。そして、その考察から子離れの後の母親であるということが、どのようなものとして理解され得るのかを検討していく。

まず、今回のインタビューにおいて、子離れするに至るまでの経験に関する語りから、そもそも子離れがどのようなものとして意味づけられているのか、について検討した。その結果、チェは、子離れを子どもを社会に託していくことと理解していることがわかった。また、同時に自分が子育てを担い続けていくことの限界も感じながら、子育てという営みそのものを手放し、子どもを家から出していったことが、子離れの経験として語られた。一方、トキは、子離れを子育ての終わりとして位置付け、またその子どもを社会に送り出すことを子育てを担ってきた母親の役割として引き受けていったことが理解された。そしてそのうえで、就職を期に子どもが社会に巣立っていくことが子離れの経験として語られた。このことから、チェとトキに

とって、子離れは、子どもが生まれてから取り組んできた子育ての終わりとして意味づけられていることがわかる。さらに、この子育ての終わりは何が終わることを意味しているのかについては、チェの場合は、子どもに直接何かを伝え、まえることを終えることであり（C11）、トキの場合は、子どもが「守るべき相手（T13）」ではなくなったことであると理解された。つまり、チェは直接的に子どもに伝え教えるというあり方での子育てを母親として担うことを終え、社会に託していくことによって子離れを経験していた。その一方でまたトキは、子どもを守るというあり方での子育てを終えて、子離れそのものを母親の役割として引き受けそれを経験していた。このように、チェとトキの子育て、子離れの経験の仕方やその意味づけ方は異なっていることがわかる。

しかし、この異なる形で理解され意味づけられた子育てや、母親としての自分を今の時点から振り返ってもらったときに共通して語られたのは、子どもの人生の中で子育てがどのような意味をもつのかはまだ見えていない、ということだった。具体的には、チェは「（自分のしてきた子育てが）成功か失敗か分かんないけどね。まだ分かんないよね（C12）」と語り、またトキは「まだ成果は出てない。これからユキ自身が母親になったときに、その成果が分かるのかなっていう気がする（中略）総括するにはまだ早いと思う（T15）」と語った。そして、その子育ての帰結は、チェはC14のように子ども自身の人生の終わりのときにしか分からないと理解し、トキはT15のように自分の子どもが子育てをする姿を見て自分の子育ての成果がわかると理解していた。このように、子育ての意味や成果がどのように見えてくるか、その具体的な理解は異なりながらも、子育ては、その営みを子離れによって完結するのではなく、子離れをした後になってから、親として自分がどのような子育てをしてきたのかが見えてくるもの、かつそれは子どもの人生や生き方を通して見えるもの、として認識されている。つまり、子離れは子育ての終わりというよりも、むしろ1つの区切りであり、この2人の母親は、子離れの先にあるものを見据えながら子どもを手放していったと理解することができ、この点は2人の母親に共通するものとしてあげられる。そしてそのような意味づけがされているからこそ、チェは「（子どもの失敗を）親って自分のせいに思うんだなって思ったの（C10）」と語るように、社会人として職場で子どもと関わりながらも、子どもの失敗する姿を母親の視点から捉え、自分の子育ての問題として母親である自分を問い直していること、一方トキは、T15, 16のように、子育てをするユキの姿を通して自分の子育てが振り返られると理解していることがわかる。以上のことを踏まえると、子育ては母親自身によって意味を付与することができるものではなく、子離れをすることによって、そして子どもの生き方を通して、初めて意味を持ち得るものとして認識されていると考えることができる。だからこそ、子離れした後に、自分の子育てを振り返るという過程が経験され、同時に、母親としての自分を振り返るという形で母親であることが経験され続けていると推測される。

しかし、この子離れした後も経験され続けている母親としてのあり方は、子離れする前のそれと同じであったのかというと、そうではなかった。むしろ、子離れを子育ての区切りとして経験することによって、チェもトキも子どもとの向き合い方や母親としての自己のあり方が変化していることが共通に理解された。具体的には、チェはC10と語るように、社会人同士としての関係をもちながらも、その子どもの失敗を見る時には母親である自分が育てた息子という視点が強く影響していることがわかる。しかし、それでも「家庭の中の親」ではなく「社会から見た親」として、自らの親としての立場の違いを語っていた。このように、子離した後の

母親としてのチェは、子離れする前のそれとは質的に異なったものとして認識されていることが理解された。トキの場合は、特に、子どもを社会に送り出したにも関わらず、子どもが戻ってくることによってまた近い距離で生活するようになったこともあり、母親が経済的に養っているという状態（T12）を背景にして親子関係が語られた。これは、表面的には子離れする前に逆戻りしたような関係として理解することもできる。また、「社会人として世間様に出せる一人前に育てたというところで区切りはついたけど、母子の関係が終わったわけではない（T15）」というように、子どもが社会で働き始めたことで子離れが生じ、その関係に区切りをつけながらも、母子の関係が今も続いているという認識も語られた。しかし、それでもトキは「やっぱり一応独立した社会人（T12）」、「大人になったユキ（T13）」として子どもを認識し、親子の関係を「人間対人間の付き合い（T11）」というような関係として語り、その子どもがこれからどのような親になるのかを見守っていることがわかった。つまり、親子という関係が繋がり続け、母親であることは変わらずに続いていく。しかしその過程で子どもに対する視点が、守るべき存在から社会で働く1人の大人へと変化し、それと同時に親としてのあり方も、子どもを守ってきた親から、もうすでに子育てに区切りをつけ社会に送り出した子どもを見守る親、言い換えるならば「守る親」から「見守る親」へと質的に変化しているということが、トキの語りからも理解された。

以上のことをまとめると、2人の母親の子離れの経験における共通性から理解されることとして次の3つのことがあげられる。

1つは、子育ては子離れを終えた時点で完結し完成するものではなく、子離れした後の子どもの人生の中で結実され、意味を付与されていくという側面をもっている、ということである。この理解に立つと、子離れは子育ての終わりではなく、1つの区切りと考えることができるだろう。

本研究では、子離れがどのようなものとして語られるのか、その意味づけそのものの検討を試みたが、本研究の結果をふまえると、子離れは、単に子どもの自立によって、物理的精神的に親が子どもから離れるという変化ではなく、その変化によって生じる子育ての区切り、また母親としてのあり方の区切りとして理解することができるだろう。同時に、子育ては直接子どもに何かを伝え守るという営みが子離れによって区切られるもの、さらにいえば、区切られることによってそのあり方が変化する営みと理解することが可能である。

2つめは、子離れがそのような側面をもつことによって、子離れを終えた後の母親であることの経験は、これまでに自分がしてきた子育てを振り返るという形で経験されている、ということである。つまり、子育てがそれを終えた時点で完結しないものであるがゆえに、子離れした後も、母親であるということは子育てを振り返るという形で経験され続けているということがいえる。

そして最後に3つめは、子離れした後の母親としてのあり方は、子離れする前の母親としてのあり方とは質的に異なるということである。つまり、子離れをした後も母親であるということは変わらずに経験され続けているが、その母親としてのあり方自体は変化しているということであり、この変化は、「家庭の中の親」から「社会から見た親」へ、あるいは「守る親」から「見守る親」へというものであった。このことから、母親であり続けるということは、単に母親であるという静的な状態としてではなく、母親でありつつも、その意味が変化する動的な過程として経験されていると理解できるだろう。

以上にあげた本研究で理解された3つの知見は、子離れを経験した母親のあり方の何を明らかにし得るのか。すでに述べたように、子育ての後の個としての母親のあり方に関する先行研究では、青年期における子どもの自立に伴った母親の子離れは、子育ての終わりとして、また母親という役割から個人としての生き方に目を向ける契機として理解されてきた。そのため、社会の中で生きる個人としての母親の側面が強調されてきた（清水，2004；大島，2013）。それゆえに、子離れした後の母親であるという側面は心理学研究ではあまり注目されず、議論されてこなかった自己の側面といえる。しかし、本研究では、母親の子離れした後の個としての側面ではなく、あえて母親であり続ける側面に焦点を当て、子離れの意味や経験、母親としてのあり方を検討してきた。その結果、子育ては子離れによって完結するものではなく、子離れした後も母親であることは経験され続け意味づけられていくという、これまで説明されてこなかった子育ての後の母親のあり方が示されたと思われる。これは、これまで取り上げられてこなかった子離れした後の母親としての自己の側面に注目することは、子育てを経験した者の自己全体のあり方を理解する上で、意義のある検討であることを示す知見であるといえる。さらに、生涯において親であることが経験され続けていくものという前提の中で、親であることの意味や親子という関係性を扱っていくことの重要性を示唆するものである。

加えて、子離れを経験する前後で母親であるということの質的な変化も示された。これは子離れをする前の親子関係にのみ焦点をあててきた先行研究（Cowan et al., 1985；鯨岡，2002；松下，2002；小野寺，2003；氏家，1996）とは異なった視点から、母親になる過程を検討したことで得られた示唆といえる。同時に、母親になるという変化は子離れをする前だけではなく、子離れを経験した後も続いていく過程であることを示す知見であり、親になる過程をより長い時間軸の中で理解することの必要性を指摘するものである。つまり、これまでの親になる過程を理解するその枠組みを拡張する必要性を示唆するものである。

本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と、それを踏まえた今後の展望を述べる。

まず、本研究はこれまでほとんど検討されてこなかった、子離れの後の段階における母親であるということの経験を扱ったため、2人の母親の子離れに関する経験をとりあげ質的に分析した。したがって、本論文の事例を一般性のあるものとして解釈することができない点に留意する必要がある。特に、今回の協力者の語りは難波（2000）で取り上げられた母親たちの語りと時代的背景を共通にもつと考えられる。その背景とは、戦後労働の工業化が進展し、女性の労働市場への参入が促されることと同時に、日本社会の高齢化・少子化という人口動態上の変化が生じたことにより、母親として人生を終えるということが当たり前だった時代から、子が自立した後に、母でもなく妻でもない個人としての人生を持つことが求められる時代になっていった（柏木，1999）という背景である。また実際に、子育てをしながらも子どもを預けて母親たちが自らの学びの場をつくるといった活動が起こっていたこと（伊藤，2004）、また子育てを終えた後に社会で活躍し始める女性が出てくることによって、単に主婦であり母親であることが軽視されるようになっていったこと（東山，1992）もふまえると、母親たち自身の中で

も母親であるということの意味が揺さぶられ、その意味の問い直しが生じていたことがわかる。本研究では、個人の歴史の中での子離れや子育てに対する意味付けの変化に焦点をあてているため、それぞれの個人史を大きな枠組みでの歴史の中に位置づけていくことはしていない。しかし、本研究の協力者も、このような時代から影響を受けながら母親としてのあり方や個人としてのあり方を選択していったと考えられる。したがって、時代的な変化の中で形成されてきたライフコースと照らし合わせ、同時に今の時代背景や子育てを取り巻く環境もふまえながら、本研究で得られた知見をより広い文脈の中で検討していくことが、今後の課題としてあげられる。

2つめとして、本研究では、青年期の子どもの自立に伴って生じる母親の子離れの経験に焦点を当てているため、青年期以前の子離れの経験は取り上げていない。しかし、今回のインタビューでは、青年期以前の時期の、子どもとの分離体験や子どもの自立していく姿を捉えた母親としての認識も語られていた。根ヶ山(1995)も、子離れは出生直後の身体的分離に伴ってもうすでに経験されていると説明するように、子離れという営みそのものは青年期以前から経験され続けているものとして理解される。さらに、チェの語りからは、もうすでに子離れしたとしながらも、今も子離れし続けていると認識されていることが理解される語りも見られた(C10)。このことをふまえると、本研究では、子離れを子育ての区切りとする理解にとどまったが、子離れをより長い期間で経験され続ける営みとして検討することも可能だろう。したがって、今後は生後に始まり青年期の自立後も経験され続けるものとして、子離れを捉え検討する必要もあると思われる。

最後に、チェの語りの中で、自分の親と自分との親子関係(第1世代と第2世代)における子育て関係を認識することによって、自分と子どもとの親子関係(第2世代と第3世代)における子育ての認識が拡張するという、3世代に渡る親子関係のあり方が理解された。具体的には、父親を介護し看取る中で年の取り方や老い方を教わることが、子育てされる経験として語られたことは、介護という形でのケアと子育てという形でのケアの重なりに関する経験として見ることができる。そしてそれは、複数の世代が重なることによって生じた経験として理解される。これは、トキの語りでは見られなかった語りであったため、本研究では共通点として取り上げることができなかったが、先行研究(鯨岡, 2002; 氏家, 2011)でも指摘されているように、今後複数世代の重なりの中で親子という関係を扱っていくことの必要性を示す知見であり、今後検討すべき課題として挙げられる。

註

1 「C1」のアルファベットは、調査協力者(チェ)のイニシャルであり、同一人物の語りであることを示す。

数字はプロトコール番号、Iは調査者を示す。以下、「T1」についても同様である。

引用文献

- 赤木真弓 (2018). 母娘関係が娘のアイデンティティ形成と精神的健康に与える影響：母娘関係尺度の作成を通して. *発達心理学研究*, **29**, 105-124.
- Belsky, J. (1981). Early human experience: A family perspective. *Developmental Psychology*, **17**, 3-23.
- Blos, P. (1967). The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the Child*, **22**, 169-186.
- Cowan, C. P., Cowan, P. A., Heming, G., Garrett, E., Coysh, W. S., Curtis-Boles, H., & Boles, A. J., III. (1985). Transitions to parenthood: His, hers, & theirs. *Journal of Family Issues*, **6**, 451-481.
- Gutmann, D (1975). Parenthood: A key to the comparative study of the life cycle. Datan, N. & Ginsberg, L.H., *Life-span developmental psychology: normative life crises* (pp.167-184). New York : Academic Press.
- Harkins, E.B. (1978). Effects of empty nest transition on self-report of psychological and physical well-being. *Journal of Marriage and Family*, **40**, 549-556.
- 東山弘子 (1992). 中年女性にとっての子離れ. 氏原寛・東山弘久・川上範夫 (共編) *中年期のころ：その心理的危機を考える* (pp.141-155). 東京：培風館.
- 平石賢二 (2014). 親子関係. 後藤宗理・二宮克美・高橋秀明・大野久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編), *新・青年心理学ハンドブック* (pp.304-314). 東京：福村出版.
- Hollingsworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: D. Appleton Century Company.
- 池田幸恭・大竹裕子・落合良行 (2006). 「子の親に対する関わり方」からみた心理的離乳への過程仮説. *筑波大学心理学研究*, **31**, 45-57.
- 伊藤雅子 (2004). 母であること・主婦であること：国立市公民館保育室活動のあゆみをとおして. 週間朝日百科日本の歴史：現代-8 男の女・大人と子ども 家族のゆくえ, **12** (118), 231-241. 東京：朝日新聞社.
- 柏木恵子 (1993). 父親の発達心理学：父性の現在とその周辺. 東京：川島書店.
- 柏木恵子 (編) (1999). 社会変動と家族の変容・発達：社会変動の発達心理学へ. 東洋・柏木恵子 (編), *流動する社会と家族 I：社会と家族の心理学* (pp.9-15). 京都：ミネルヴァ書房.
- 岸 政彦 (2018). *マンゴーと手榴弾：生活史の理論*. 東京：勁草書房.
- 北村琴美・無藤隆 (2001). 成人期の娘の心理的適応と母娘関係：娘の結婚・出産というライフイベントに着目して. *発達心理学研究*, **12**, 46-57.
- 北村琴美・無藤隆 (2003). 中年期女性が報告する娘との関係と心理的適応との関連. *心理学研究*, **74**, 9-18.
- 小高恵・紺田広明 (2015). 中学生の母娘関係の日々の相互作用の一分析：動的因子分析を適用して. *青年心理学研究*, **26**, 109-128.
- 鯨岡 峻 (2002) 〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ. 東京：日本放送出版協会.
- 久世敏雄・久世妙子 (1980). 自立心を育てる. 東京：有斐閣.
- 松下美知子 (2002). 女性と自己実現. 岡本祐子・松下美知子 (編), *新 女性のためのライフサイクル心理学* (pp.226-243). 東京：福村出版.
- Mahler, M. S., Pine, F., & Bergman, A. (1975). *The psychological birth of the human infant*. New York: Hutchinson.
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係：「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討. *教育心理学研究*, **59**, 462-473.

- 水本深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係:精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差. *教育心理学研究*, **66**, 111-126.
- 難波淳子 (2000). 中年期の日本人女性の自己の発達に関する一考察:語られたライフヒストリーの分析から. *社会心理学研究*, **15**, 164-177.
- 根ヶ山光一 (1995). 子育てと子別れ. 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著), *子別れの心理学:新しい親子関係像の提唱* (pp.12-30). 東京:福村出版.
- 西平直喜 (1990). 成人(おとな)になること:生育史心理学から. 東京:東京大学出版会.
- 岡本祐子 (2002). 人生の正午-中年期. 岡本祐子・松下美知子 (編), *新 女性のためのライフサイクル心理学* (pp. 176-198). 東京:福村出版.
- 小野寺敦子 (2003). 親になることによる自己概念の変化. *発達心理学研究*, **14**, 180-190.
- 大島聖美 (2013). 中年期母親の子育て体験による成長の構造:成功と失敗の主観的語りから. *発達心理学研究*, **24**, 22-32.
- 佐藤健二 (1995). ライフヒストリー研究の位相. 中野卓・桜井厚 (編), *ライフヒストリーの社会学* (pp.15-41). 東京:弘文堂.
- 清水紀子 (2004). 中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティ. *発達心理学研究*, **15**, 52-64.
- 荘島幸子 (2008). トランスジェンダーを生きる当事者と家族:人生イベントの羅生門的語り. *質的心理学研究*, **7**, 204-224.
- 田島信元 (1995). 家族と子別れ. 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著), *子別れの心理学:新しい親子関係像の提唱* (pp.42-59). 東京:福村出版.
- 谷富夫 (1996). ライフ・ヒストリーとは何か. 谷富夫 (編), *ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために* (pp.3-28). 京都:世界思想社.
- 氏家達夫 (2011). 親子関係と生涯発達. 氏家達夫・高濱裕子 (編), *親子関係の生涯発達心理学* (pp.1-45). 東京:風間書房.
- 氏家達夫 (1996). *親になるプロセス (認識と文化)*. 東京:金子書房.

The experience of separation in child-parent relationship from mother's perspective: How mothers experience to be the mothers after the separation from their children?

Yu NAMIOKA

Key Words

Child-parent relationship, Child rearing, Separation in child-parent relationship (KOBANARE), Experience, Life history

Abstract

This study examined the experience of being a mother after separating from their children ("KOBANARE" in Japanese). To explore this issue, interviews of two mothers were conducted and analyzed qualitatively using life history method. The study revealed three main findings. First, separation does not mean the end of motherhood, but instead is perceived as a transitional stage; so, the mother still plays a meaningful role in the child's life even after separation. Second, after separation, the mother continues to fulfill her role by looking back on her parenting. Third, the meaning of being a mother changes but still remains after separation, which means that this transition is also part of motherhood. To conclude, this study has showed that it is crucial to understand that motherhood has a longer timeframe as it includes the post-separation stage. Based on the assumption that motherhood is a lifetime journey, this research further suggests the importance of examining the definition of motherhood and the characteristics of the child-parent relationship.